

①二条城行幸御屏風(部分) 泉屋博古館 **②唐衣表着・繪扇(東福院院所用)(部分)** 靈巖寺【展示期間：9/5～9/27】
③百穂園巻(部分) 根津美術館 **④黒輪子地格子袴菊吉祥模様の小袖屏風(部分)** 国立歴史民俗博物館【展示期間：9/29～10/18】
⑤純金茶入・天目・天目台 徳川美術館 ⑥徳川美術館イメージアークイブDNPart.com
⑦東福院佛像(部分) 光雲寺

寛永行幸四百年記念 特別展
SPECIAL EXHIBITION COMMEMORATING THE 400TH ANNIVERSARY OF
THE IMPERIAL VISIT TO NIJOJO-CASTLE, THE SHOGUN'S CASTLE

2026 9.5th – 10.18th

【開館時間】月曜日 9 時 1 時・入館は 16 時 30 分まで
 【休館日】月曜日 7 月 21 日・10 月 12 日は開館、9 月 24 日木、10 月 13 日火
 【入館料】一般 1200 円（1000 円）、学生 800 円（700 円）、
 18 歳以下無料。●学生 18 歳以下のかたは証明書を、●展示料は●
 ●本展覧会の入館料をプロセスキャッシュと同等にたす。●20 名以上は（）の団体料金
 ●胸がけ手帳等、このほかには●本および●観覧者 1 名につき●資料
 ●主催（公益財団法人京都市博物館、公益社団法人・京都新法）、京都市
 ●京都市教育委員会、京博連、公益社団法人京都市観光協会、N 日（京都放送局）
 ●協力（寛永幸行四百年祭実行委員会）【助成】日本芸術文化振興基金

將軍の娘で天皇の后
融和に尽くした
東福門院が
つたえしもの
1626

THE MAGNIFICENT PROCESSION OF THE EMPEROR AND THE SHOGUN, 1626

泉屋博古館

SEN-OKU HAKUKOKAN MUSEUM

寛永行幸と花の都の文化びと 展覧会概要

江戸時代初期にあたる寛永3年（1626）9月、大御所徳川秀忠・将軍徳川家光の招きにより後水尾天皇が京都・二条城に行幸されました。初日の9月5日には、天皇一家と公家、将軍と全国の大名がそろって天下の大行列に、京の街は空前の活況を呈します。寛永行幸は泰平の世の到来を告げ、新たな文化の胎動をうながしたともいえるのです。

本展では行幸行列を活写する泉屋博古館所蔵《二条城行幸図屏風》（京都市指定文化財）を中心にこの歴史的盛事を振り返ります。そしてその前後から17世紀後半にわたり展開した寛永文化について東福門院（徳川和子）という一人の女性を起点に見つめていきます。将軍の娘にして天皇の後となった彼女の周辺では、後水尾天皇、千宗旦、松花堂昭乗、小堀遠州、野々村仁清など、きら星の如き文化人たちが身分を越えた交流を通じ、それぞれの美の形を結びました。会場では公・武・民の架け橋となった東福門院ゆかりの品々をまじえ、その美と交流の足跡をたどります。

当館の近隣には東福門院菩提寺の光雲寺をはじめ、江戸初期復興のゆかりの社寺が点在しています。往時の雅人の息づかいを今に伝えるこの地で寛永文化に思いを馳せる一時をお過ごし下さい。

【本展のみどころ】

1. 徹底解剖！《二条城行幸図屏風》

史実を踏まえた確かな記録性、熱気あふれる風俗描写の臨場感、驚異的な描き込み。類品中에서도随一とされ、寛永行幸四百年祭のキービジュアルともなっている当館所蔵の《二条城行幸図屏風》（京都市指定文化財）がいよいよ登場します。実物のもつ迫力を体感できるまたとない機会です。さらにガラス越しでは確認できない細部の見どころを高精細画像によりご紹介します。

2. 最高級！徳川家出身の皇后さまの衣裳調度

日本史上、唯一、将軍家に生まれ天皇に嫁した東福門院・徳川和子。幕府と朝廷のはざまにありながら、しなやかに生きた彼女の生涯を象徴する貴重な品々が並びます。現存最古の十二単はじめ、江戸時代を通じ最も存在感のあった皇后の最高級の衣裳調度です。

3. 東福門院の創作品、押絵に注目

東福門院が自ら創作に携わった押絵が集合します。美しい端切れをはりあわせて描く押絵は、こののち宮廷の女性からひろがり、羽子板などの押絵や雛人形のルーツになったとも言われます。東福門院が大切な人々に贈ったこれらの作品からは、教養や美的感性、さらに贈った相手へのこまやかな情愛がしのべられます。

4. 名品でたどる寛永文化のスターの交流

後水尾天皇、徳川家光、近衛信尋、小堀遠州・・・ 行幸に参加した面々は多く芸術方面にも高い関心を持ち、優れたセンスで収集し、またプロデュースして茶の湯の道具としました。行幸がもたらした古典復興、公武融合といった文化の潮流のもと寛永の美術工芸が到達した粋と、背景にある交流の物語を読み解きます。

第一章 寛永行幸 ―新時代をつげる文化の饗宴

今を遡ること400年、寛永3年（1626）9月、大御所徳川秀忠・将軍徳川家光の招きにより、後水尾天皇が京都・二条城に行幸されました。武家のもとへの天皇の行幸は歴史上も数えるほど。幕府は威信をかけ、東西の智者を動員して、戦乱で途絶えた伝統をひも解き復興、また武家文化の要素も盛り込み、贅と趣向を凝らしたもてなしを5日間にわたり繰り広げました。

初日の9月5日には、二条城へ向かう天皇一家と公家、そして彼らを迎え先導する将軍と全国の大名の行列がそろって民衆の目前を進みました。それを一目見ようと全国から人びとが集まったと伝えられています。その様子を活写するのが《二条城行幸図屏風》です。史実に即した高い記録性、そして沿道の最先端の風俗や悲喜こもごもの人間模様まで、他に類をみない驚異の細密表現で近年注目が高まる泉屋本《二条城行幸図屏風》。高精細画像も活用して余すところなく紹介します。



《二条城行幸図屏風》京都市指定文化財 江戸時代・17世紀（泉屋博古館）



天皇の鳳輦（左隻部分）

大勢の賀興丁に奉じられ行幸する後水尾天皇。方形造の屋根に鳳凰の飾をつけ、四周には綾か錦のような幕が。鳳輦は平安時代以降、神輿の原型となった乗り物。鳥兜を被った楽人が雅楽を演奏し天皇の進む道を清める。



将軍家光の牛車（右隻部分）

葵のご紋に飾られた将軍の牛車は、皇親や摂関のみに許される唐庇車（からひさしのくるま）。牛車のあとに続く黒毛の馬はたてがみの揃えも美しく、特別な位にしか許されない紫色の房飾りをつけて歩く。

東福門院 中宮和子の牛車（右隻部分）

将軍と同じ二頭立ての牛車は天皇家では唯一とり、中宮・和子のもの。散りばめられた葵紋は中宮が徳川家出身であることを暗示する。



沿道の観衆

行幸の沿道には、一目見ようと諸国からつめかけた人がぎっしり。老若男女問わずさまざまな集団が着飾り、浮かれ騒ぐ。不謹慎なまでに自由に楽しむ彼らは、幕府からの下賜金や特需による“行幸景気”に湧き、平和を謳歌しているよう。



(左隻部分)

道沿いの柵の向こうに居並ぶさまざまなグループ。武士や町人、僧侶そして家族連れ。みんなお洒落して思い思いに過ごす。なかには行幸より運び込んだごちそうやお茶に夢中な人、幔幕をめぐらせ大勢の遊女をはべらせるお大尽も。



(右隻部分)



(左隻部分)



(左隻部分)

厳肅な行幸のまえてまさかの喧嘩！
行幸よりも注目を集める？！

ファッションにも注目。絢爛たる小袖の競艶は、超絶技巧と自由な発想から生まれた。絶妙なバランスで黒、白、赤などの地色を染め分け、刺繍や金銀の摺箔、鹿の子染で細やかな模様を施し、金襴、天鷲絨、更紗など異国の素材を大胆に取り入れている。



男子も負けてません！

第二章 東福門院 ―文化の架け橋として

寛永行幸の実現に大きな役割を果たしたのが徳川和子、のちの東福門院 (1607～1678) でしょう。二代将軍・徳川秀忠の五女で、家康の宿願により元和6年、十四歳で後水尾天皇のもとへ入内しました。江戸開幕以来、幕府は圧倒的な武力と財力を背景に朝廷に対する統制を強め、両者の軋轢が深まるなかでの政略結婚でしたが、二人は仲むつまじく行幸の際には二人の姫宮に続き懐妊中で、幕府・朝廷の融和ムードに拍車がかかりました。「将軍の娘」という前代未聞の出自をもつ后に反感を抱く者も少なくないなか、温順な人柄と心配りで天皇との愛情を深め、周囲の信頼を集めていったといえます。

東福門院を通じ幕府からもたらされた莫大な資金は、法皇となり長らく院政をしいた後水尾院と東福門院による社寺再興や文化活動を支えました。世紀のロイヤルウエディングともいえる東福門院入内は、寛永行幸とならび後世に語り継がれ、しばしば絵画化されたことは、京の町における東福門院の存在感の大きさを物語っています。本章ではまず、彼女の入内とその生涯を象徴する品々から、「菊」と「葵」の狭間で真摯にしなやかに生きた東福門院を偲びます。



《東福門院御領 唐衣表着裳装束》
江戸時代・17世紀（霊鑑寺）
京都府指定文化財
【展示期間：9月5日～9月27日】
＊現存最古の十二単とされる



《枝菊蒔絵香合》江戸時代・17世紀（徳川美術館）
＊東福門院の入内の婚礼調度だったと考えられる



《東福門院》江戸時代・文政10年（1827）
（光雲寺）京都市指定文化財

ここもみどころ！特別出品 東福門院の仏舍利塔―菊と葵



《東福門院所持 仏舍利宝塔》江戸時代・17世紀（光雲寺）
京都市指定文化財【展示期間：9月5日～9月13日、10月7日～10月18日】

東福門院が生涯手元において礼拝したという仏舍利塔。両掌にのる小さながら緻密な装飾が施された金銅製の塔です。注目点は、朱漆の台の紋。菊紋を戴くように葵紋が両脇に配されています。しかし通常は見ることの出来ない側面には、菊紋・葵紋が対等に並列しています。この時代の幕府と朝廷の関係性をここにみるようで、さまざまな解釈を呼んでいます。通常は東福門院の菩提を弔う光雲寺の仏殿に安置されていますが、期間限定で本展に特別に出品されます。



朱漆台側面の菊紋・葵紋。両者が並列する

創作する女院

東福門院は、自ら創作にいそしむ表現者としての一面もあったようです。なかでも代表的なのが「押絵（おしえ）」でしょう。染織品を貼り合わせて歌仙や演能風景、神仏などを描くものです。用いられる染織品はいずれも上質で小物用に織られたと想像されます。その取り合わせからは、モチーフに対する有職や文学的素養、細やかな観察眼がうかがえます。もちろん、これらすべてを女院自身が直接加工したかは不明ですが、少なくともデザインや構想に深く関わった「女院プロデュース」の作とみられます。というのも、今日「東福門院作」と伝称されるこれらの工芸作品は、皇族や大名、僧侶や茶人など、生前、女院と親交した人物にゆかりある限られた社寺や家にて守り継がれてきており、女院から直接贈られた記憶とともに大切にされてきたことがしのべられます。上質な素材を用い丁寧に手をかけ創作された極めて華奢で愛すべきこれらの小品からは、東福門院の感性や教養、さらに階層をこえた文雅な交流が浮かび上がります。



東福門院作《兔文橘香合》江戸時代・17世紀
(徳川美術館)

* 柑橘の実を加工した香合。職人技ではないがこちなさかえって愛らしい

ここもみどころ！

裂を切り貼りして描く「押絵」は御所の女性たちから大名など上流階級の女性、そして市井に広がり、「雛人形」や羽子板などの「押絵」のルーツになったともされます。



東福門院作《能「楊貴妃」押絵》江戸時代・17世紀
(泉屋博古館)

* 能「楊貴妃」の舞台風景を、各種の裂（きれ／染織品）を切り貼りして表現する押絵の技法であらわした作品。
信頼篤かった茶人千宗旦に贈ったもの



東福門院作《馬郎婦観音図押絵》江戸時代・17世紀（永源寺）

* 夭折した禅僧一絲文守に贈る

(部分)

小袖マニアの女院

雁金屋など尾形光琳の父や親族の営む呉服商の手控えには、東福門院から膨大な量の小袖を受注していることが記されています。綸子に刺繍、絞り、黒紅染など贅をこらした技法、アシンメトリーで大胆な意匠など、豪華な小袖のデザイン画の数々をみることができます。東福門院は自身のためだけでなく、皇女や女官ら周辺の女性たちにも惜しみなく小袖を贈り続けたこともわかっています。もともと武家中心の衣類だった小袖が御所、そして公家社会に広がる契機にもなったといえます。



《黒綸子地斜格子菊吉祥文模様小袖屏風》
江戸時代・17世紀（国立歴史民俗博物館）
【展示期間：9月29日～10月18日】



《浪に網目模様小袖》（復元品）
2004年（関西学院大学博物館）

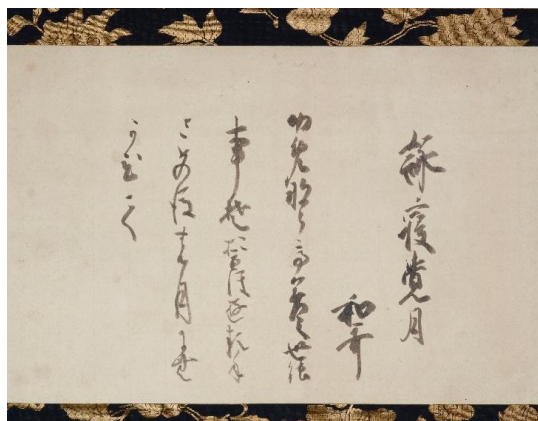
第三章 寛永文化の人びと 一公・武・民のミックスカルチャー

歴史的な盛事、寛永行幸の主客となった公武の貴人たちは、また多く芸術文化に親しみ、寛永文化形成に大きく寄与しました。後水尾天皇、徳川秀忠、徳川家光、近衛信尋、小堀遠州…、それぞれに和歌を詠み書をしたため、時に絵筆を揮い茶道具の制作にも携わっています。職人や画家などの鍛錬された作とは別趣の、その人の品性や趣味を映すかのような手跡は、一流文化人の証ともなりました。また、千宗旦や野々村仁清など民間の茶人や芸術家と交流し相互に刺激しあうことで、個性豊かで斬新な作品が生まれ、またその文化が広く民間に浸透していくことともなりました。本章では、彼らの作品や愛蔵の茶道具を通じ、公・武・民が響き合いながら形成され、今日に至る文化芸術の礎にもなった寛永文化の豊かな世界に思いを馳せます。



《百椿図巻》江戸時代・17世紀（根津美術館）

*寛永の椿ブームのなか、当代の文化人が身分階層をこえて和漢の賛を寄せ書き



後水尾天皇筆《和歌懐紙 詠寝覚月》江戸時代・17世紀（泉屋博古館）



《青磁福寿香炉》祥雲寺伝来
元時代・14世紀（泉屋博古館東京）

*徳川家光の下賜品



《唐物文琳茶入 銘 若草》南宋時代～元時代・
13～14 世紀（泉屋博古館東京）

*行幸の仕掛人のひとり、金地院崇伝旧蔵



《小井戸茶碗 銘 六地藏》朝鮮時代・16世紀（泉屋博古館東京）

*小堀遠州遺愛



《大講堂釜》室町時代・16世紀
（泉屋博古館東京）



野々村仁清作《鶏撮丸香合》
江戸時代・17世紀（泉屋博古館東京）

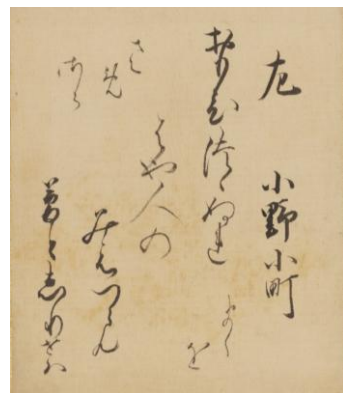


《宇治焼茶入》千宗旦好み
江戸時代・17世紀（表千家不審菴）

*仕覆は葵御紋入りの裂



土佐光起筆《女房三十六歌仙画帖》
江戸時代・17世紀（三井記念美術館）



展覧会の概要

展覧会名	寛永行幸四百年記念 特別展 寛永行幸と花の都の文化びと
会 期	2026年9月5日（土）－ 10月18日（日）
開館時間	10時～17時 ※入館は閉館の30分前まで
休 館 日	月曜日（9/21、10/12は開館）、9/24（木）10/13（火）
入 館 料	一般 1,200 円（1,000円） 学生 800円（700円） 18歳以下無料 ※本展覧会の入場料で青銅器館もご覧いただけます ※20名以上は（ ）内の団体割引、障がい者手帳ご呈示の方は介添者一名まで無料
会 場	泉屋博古館 〒606-8431 京都市左京区鹿ヶ谷下宮ノ前町24 https://sen-oku.or.jp/kyoto/ TEL：075-771-6411
交通アクセス	京都市バス JR・新幹線・近鉄電車「京都駅」／京阪電車「三条駅」から5、105系統 阪急電車「烏丸駅」から32、203系統 地下鉄烏丸線「丸太町駅」から93、204系統 5、93、203、204系統「東天王町」下車、東へ200メートル 32、105系統「宮ノ前町」下車すぐ 地下鉄 東西線「蹴上駅」から徒歩約20分

寛永行幸四百年記念祭について

2026年、「寛永行幸」から400年の節目に、行政・経済界・文化芸術団体等によるオール京都の組織「文化庁連携プラットフォーム」のプロジェクトとして後水尾天皇の行幸行列を再現するイベントや、「寛永文化」を振り返る各種企画を実施する記念祭を実施します。

【開催期間】2026年を中心に、様々な企画を実施

【開催場所】二条城、京都市内施設、その他全国の寛永ゆかりの地

【主 催】寛永行幸四百年祭実行委員会（文化庁連携プラットフォーム内に設置）

寛永行幸四百年祭の全体像

①実行委員会による主催事業－「寛永行幸」講座・行列

②連携機関による寛永文化事業－文化サロン、展覧会、事業連携認定事業

〔泉屋博古館〕 寛永行幸四百年記念 特別展「寛永行幸と花の都の文化びと」

〔京都文化博物館〕 特別展「寛永 太平がはぐくむ美」2026年9月19日（土）～11月15日（日）

〔二条城障壁画〕 展示収蔵館 企画展「寛永行幸特集（仮）」2026年8月～12月

③関連認定事業－各種団体の活動を活性化

〔問い合わせ先〕 泉屋博古館 広報担当課長 坂井さおり pr-kyoto@sen-oku.or.jp
学芸部長 実方葉子

〒606-8431 京都市左京区鹿ヶ谷下宮ノ前町24 電話 075-771-6411 FAX 075-771-6099

寛永行幸四百年記念特別展 寛永行幸と花の都の文化びと
広報用画像一覧



《二条城行幸図屏風》江戸時代・17世紀 京都市指定文化財 泉屋博古館



《東福門院像》江戸時代・文政10年（1827）
京都市指定文化財 光雲寺



《東福門院御領 唐衣表着》江戸時代・17世紀 京都府
指定文化財 霊鑑寺【展示期間：9月5日～9月27日】



後水尾天皇《和歌懐紙 詠寝覚月》
江戸時代・17世紀 泉屋博古館



東福門院《能「楊貴妃」押絵》江戸時代・17世紀
泉屋博古館



《小井戸茶碗 銘 六地藏》
朝鮮時代・16世紀 泉屋博古館東京



東福門院《和歌色紙》江戸時代・17世紀
京都市指定文化財 光雲寺



《百椿図巻》部分 江戸時代・17世紀 根津美術館



《唐物文琳茶入 銘 若草》
南宋時代～元時代・13～14世紀 泉屋博古館東京



《青磁福寿香炉》
元時代・14世紀 泉屋博古館東京



野々村仁清《鶏撮丸香炉》
江戸時代・17世紀 泉屋博古館東京